

以前より、「がん家系」という言葉が使われてきました。「身内のほとんどががんにかかっている、たぶん自分もがんになるから、長生きはできないだろう」。このように考えている人は大勢います。つい最近までは、医療者も同じ思いをしていました。「この患者の家族はみんながんにかかっている、きっと子どももがんになるだろう、しかしそれを正確に予測する方法はないし、わかつたとしても何もしてあげられることはない」。

遺伝子診療最前線 up to date

⑨ 遺伝性腫瘍とがんゲノム プロフィール検査の二次的所見

北大病院臨床遺伝子診療部

三田村 卓 (婦人科)

場に変化が現れつつあります。

ポイントには、大きく4点あります。

①家族もがんにかかる危険性が高い場合、体のどの部位に、何歳くらいで発症するかを予測できる。その情報を利用してよく検討しておけば、人生設計に合わせてがんが

発生する臓器を先に手術で摘出することにより助かるかもしれない。②子どもや兄弟姉妹など、本当に病

③放射線被ばくなどによる原発性がんの発症を避けることができる。

④すでにがんを発症している患者の場合、有効な治療薬が見つかるかも

代表的な遺伝性のがんでは、遺伝性乳がん卵巣がん症候群を例に挙げ

て考えてみます。本症候群では、BRCA1ある検査を受けて同じ遺伝子変化を受け継いでいない

卵巣を摘出することが勧められています。卵巣が一度進行してしまつ

と治療が難しく長期生存率が下がってしまった

め、発症させないための対策が重要であり、実際に

検査を受けて同じ遺伝子変化を受け継いでいない

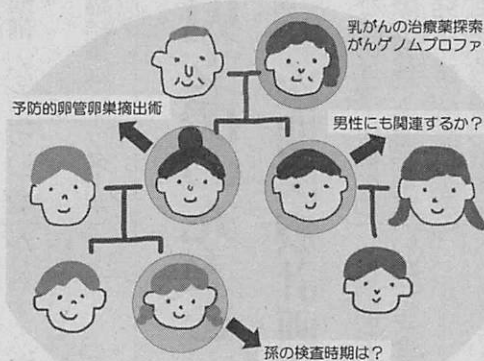
このような家系の女性では、特に40歳以降で卵巣がんの発症率が高くなるため、妊娠出産の予定はないと思う段階で卵管と



次世代シーケンサー



遺伝カウンセリング 遺伝専門医



人々にとっては理解しやがたく困っているがん患者は、時に思いがけない形で遺伝性のがんが見つかることもありま

偶然に現在のがんが遺伝性腫瘍である可能性が示唆されたり、さらには現在のがんとは関係のない

遺伝性疾患が見つかったりする場合、全身状態が悪く、検査結果を受け止

めに対する思いを傾聴し、今後どうし

本人の原病のみならず、家族の将来をも見据え、計画を立ててくれたり、本人の原病のみならず、家族の将来をも見据え、計画を立ててくれたり、